

有森 信二

その瞬間。

それは、火を吐くほどに激しいものでもなく、背中を凍りつかせるという恐怖に誘うものでもなかった。

例えていえば、秋。そう、なんともないこともない秋の風情に似ていた。

あたりはどこまでも透き通り、底までも突き抜けてしまふ明るさ。手を指し伸ばせば、すぐにでも届きそうな近くにあるくせに、途方もないスピードで遠退いていくのがはつきり見えている。

その瞬間は、なんの前触れもなくやってきた。

大音響とともにきたのでもなければ、火の粉とともに降り立ったのでもない。大地がうねり、水が躍り上がり、などというものでもない。

消えてしまった。

突然、ありとあらゆるもの、すべてが消えてしまった。

いつもの時の、いつもの空間に、まばゆいばかりに輝いていた赤や青の星たちが、ふいに色を失い、退き始めた。

瞬く間に、それでいて、まどろっこしいほどの逡巡をみ

せながら、しかも確実に星たちは遠ざかり、広がり、やがてふっと消え落ちていった。

星も、月も、地も、空も、海も、人も、光も、時も、闇さえも、遠ざかり、落ち、消えてしまった。

残されたものは、(かつての、私の三半規管にわずかにとどめられた残像なのであろうか)どこかの高原を吹き渡る微かな風の音と、いまのいままであたりの空間をきつちり埋めていたものたちの、溜め息に似たささめきであった。

五十も半ばを過ぎたいまでさえ、この瞬間のことを忘れない。というより、いよいよ身近なものになってきた、という思いすらある。

隣県までの百キロ近い通勤を始めて三十年が過ぎた。つい最近までは、それほどでもなかった百キロという距離が、この頃いささか重荷に感じられるようになった。

教壇にいと、学生たちの姿がだんだん遠ざかり、しまいに誰一人いなくなってしまうのではないか、という思いにとらわれることがある。満員に近い大講堂で、彼らの気持をかなり引きつけている、という手ごたえをつかんでいるときでさえ、そんな思いは消えない。

毎日往復する高速道路を、百数十キロというスピードで走りながら、いつの間にか私の思いは、あの秋の情景へと

移っている。

ハッ、というタイミングで幾度ブレーキを踏み、ハンドルを路肩めがけて切ろうとしたことか。あるいは、風圧で飛ばされそうな至近距離を大型トラックに抜かれ、「バツキヤロウ」という罵声とともに、耳を切り裂くクラクションを幾度浴びせられたことか。

その瞬間、を見たのは、小学校にあがったばかりの頃のことだった。

季節の変わり目には決まって体調を崩し、寝込んでいた私は、入学して一月足らずという蒸し暑い日、九度の高熱を出し、学校を休んだ。

父と母は畑に出、二人の弟も一緒に出ていたから、だだっ広い家に残っているのは私だけだった。

広いといっても、農家ならどこにでもある造りで、十畳くらいの土間、上がり框に続く四畳半、六畳の囲炉裏、六畳の仏間、六畳の客間、八畳の座敷、三畳の納戸、それに二階といった具合であった。

私が寝込むと、どういうわけか、いつも二階の子供部屋から下ろされ、座敷に布団が敷かれた。

座敷には一間幅の床の間があり、掛け軸が下げられ、お堂の形をした白木の造り物が置かれていた。そして、大黒柱横の鴨居の上には、(当時の私には)誰のものとも知れ

ない二枚の写真が掲げられており、私はその写真の真下に寝かされるのだった。

私は、座敷に下ろされるのは好きでなかった。戸と襖に仕切られた八畳が、途方もない広さに思えたし、それでいて、戸や襖や天井の、小さな隙間や節穴から、いつも誰かに覗き込まれているみたいで、落ち着かなかった。

それに、つい半年前には、私が横たえられているちやうど同じ場所に、冷たくなつた祖母が隠居部屋から移され、祭壇が設けられたのだった。

家は江戸時代末期に建てられたといい、屋根こそ葺きから瓦葺きに替えられてはいるものの、玄関戸にも戸襖にも、畳にも天井にも、いたるところに無数の人々の生活の痕跡が残され、彼らの息遣いが、そこかしこに、いまでも漂っているのを感じるのだった。

私は、畳表の黴臭さのムツとくる八畳間の真中に、床の間を頭に寝て、熱にうなされていた。

九度を越える熱は、村の医者への往診で昼頃にはいくらか下がったものの、日が陰り始める頃になると、また元のあたりまでぶり返し、丸一日なにも口にしていない体は、ひどくたよりなかった。

私は、猛々しいなにものかの力で押し潰された糞虫みたいに、手足を縮ませ、ただ仰向けに寝ていた。

眠れなかった。

とはいえ、普通に目を開けていられる状態ではない。それでも懸命に目蓋をこじ開け、天井を眺めていた。

頭が痛かった。頭の芯が、ジンジン鳴っていた。頭痛いということは、頭のあちこちがひび割れつつあるのかもしれない、と思うほどだった。

ふと私は、天井の、ひときわ節の大きな板の目が、徐々に輪を広げ始めているのに気付いた。とみる間に、輪は板の一枚をのり越えてしまった。その板の目が揺らいだと思つた瞬間、いきなり、水が滴り落ちてきた。

水は、身動きできない私の鼻先めがけて、勢いよく降り注ぐ。

瞬く間に濡れそぼってしまった私は、手を伸ばし、足をバタつかせ、体をよじって降り注ぐ水を遮ろうとするのであるが、意志に逆らい、手も足も体も、ピクリとも動かない。口も動かない。

「やめる」

「誰かきてくれ」

と叫ぶ私の声は自分の耳には届かないし、なにより、唇を開くことさえできない。

そうしているうち、天井の板の目の一つ一つが、人の顔になり、奇妙な泣き顔になり、大笑いの顔になり、叫んだり、呟いたり、怒ったりし始めた。ザワザワ、オウオウ、

彼らは叫び、罵り合い、手足を踏み鳴らして座敷中をいつたりきたりする。

その度に、板の目が、右に、左に揺れた。板の目は、伸びたり縮んだりしながら揺れ、震え、回る。

板の目は果てもなくぐるぐる回りながら、次には、天井を、柱を、壁や襖や戸を巻き込み、アンドロメダ座星雲そのままに空高くめぐっていく。

すさまじい光の束が宙をよぎり、音が走った。

光と音とが交錯する間に、宙は際限もなく広がりを、無数の星雲が生まれ、こぼれるほどの星々が瞬いている。

漆黒の闇を背景に、一際巨大な太陽が浮かび、太陽に寄り添い、緑色の天球がゆっくりめぐっている。

微笑んでいた。

星が、太陽が、緑色の天球が、宙のすべてが微笑んでいた。漆黒の闇を、キラリと光の束が走り、生まれたり、死に替わったりするものたちが、宙のいたるところに列をなし、並んでいた。

どこかで、なにかが噴出した。

天井の板の目から、一際激しい水流が降りきたったときだったか。

あるいは、板の目の隙間から覗いていた蜘蛛の巣が、微

かに揺らぎ、座敷を縦横にいき交うものたちの声が、甲高いのしり合いの声に変わったときだったか。

消えてしまった。ふっと、蠟燭の火を吹き消してしまつたかのごとく、星たちが消えてしまった。太陽も、緑色の天球も、光も、闇も、ののしり合っていたものたちの声も。

私は、自分の目を疑った。一旦、目をつむり、再び開いたときには、これまでとなんの変わりもない光景が、ちゃんとそこにある、と考えた。

目を瞬こうとした。が、目がつむれない。目蓋を動かそうにも、まるで力がこもらない。

しかたがないので、瞳を見開いたまま、かつて網膜の奥に焼き付いた光や闇や、ものたちの姿を探そうとした。

しかし、ない。目に映るものは、なにもない。

耳に聞こえるものも、臭いも、なにかの微かな気配も、なにもない。

私の目の前にあるものは、秋の空のあのあつけらかなと澄み渡った空隙、とても呼べば当たるだろうか。とにかく、カラカラと秋風が吹き過ぎていく風情に似た、茫漠として果てのない空隙だけが残された。

〔神罰〕

私の胸のうちを、突然、そのことばがよぎった。

まだ六歳になったばかりの自分の語彙に、そんなことがあらかじめ準備されていたとは、現在に至っても信じられない。

ピクリとも身動きできない私の耳に、そのことばが早鐘となつて打ち鳴らされる。

このままではいけないと思い、誰か人を呼ばなくてはと声を出そうとした。父や、母を大声で呼んだ。二つ違いの弟の卓二や、歩き始めたばかりの浩三たちの名も呼んだ。知っている人の名を、思いつく限り呼んだ。

その自分の声が、自分の耳に届かないことに気付いたのは、父や母や弟たちの名を呼び始めて、いくらか経たないうちだった。

自分の声が、口から出ない。ことばにならない。音にならない。つまり、口も、唇も、全く動かないのである。

「父も、母も、卓二も浩三も、消えてしまった」

「祖父や、祖母や、友だちや、担任の女教師も、鴨居の上の二枚の写真も、なにもかも、みんな消えてしまった」

私の頭のどこかに、低く囁く、そんなことばがスッと入り込み、それがしごく当然なことだと思われ、ああそうだったではないか、と頷く思いで、私は、なんの抗いもなく納得したのだった。

「すべてというすべてが消えてしまった」

「私自身も、消えてしまった」

であるのに、その瞬間を、こうして見届けている自分というものは、いったいなんという存在なのだろう。

私の記憶は、そこで途切れてしまう。

気付いたとき、座敷には電灯が灯され、卓二と浩三の顔が覗き込んでいた。

私は、奇異な思いで彼らを見上げた。脈絡がつかない。なんでお前たち、ここにいるのだ、といいかけて口を閉ざした。

私の体は、元どおりに動くようになっていた。布団からはみ出した首筋のうそ寒さに、襟を掻き合わせ、左足に巻きつけたシーツを右足で広げた。

天井の板の目は、裸電球の光に遮られ、薄闇に沈んでいた。鴨居の上の二枚の写真も、ぼうつと霞んでいる。

いいようがなかった。

ここには、あの、消え去った筈のものたちが、ちゃんとある。なに一つ変わらない、そのままの姿で。

それらは本当に、一度、無限遠の彼方に去り、再び戻ってきたのであろうか。

それはともかく、被さる恰好で私を覗き込んでいる弟たちを見ているうちに、なんともいえない安堵と、壊れる前の玩具を手にしたみたいな懐かしさが一時に湧いてきた。

一歳半になる浩三は、私の鼻先に触れそうなほどに顔を

寄せ、覗き込んでいたが、私が目を開いたのを知ってか、

あわてて立ち上がるうとして布団の縁に躓き、もんどりうって私の胸の上に倒れ込んできた。そして、頓狂な顔で起き上がり、いや起き上がるうとして、布団の窪みに足をとられ、今度は卓二の方に倒れかかった。

それらを眺めていると、先ほど見たあの秋の光景などあつてたまるか、という気持だった。

父も、母も、弟たちも、友だちも、担任の教師も、勿論自分だって、消え去っては困るのだ。

そんなことを考えているうち、また眠りに落ちた。

抜き差しならない泥沼に入っていくのに似た、どろりとした眠りだった。

自分は、うなされていた。

必死に駆けていた。逃げて逃げて、息絶え絶えに、めくらめつぼう手を指し伸ばしていた。

「熱は、ちつとも下がってないんだねえ」

母がもんぺ姿のまま、粥を運んできた。弟たちが、私の枕元を走り回っていたのか、母は小声で叱った。

あの瞬間のことは、五十年経ったいまでも忘れたことはない。

といつて、声高に他人に喋るほどのものではないし、この十数年というもの、私自身、日々の生活に埋没している

というありさまだったから、気持の片隅に置き忘れたみたいになつていった。

勿論、全く喋らないというわけでもなく、酒の席などで気のおけない仲間に話しかけたりしたことはあるが、いつも一笑に付されてしまうのが落ちだった。

助手から講師、講師から助教授、そして教授へと、人並みに階段をのぼっていく間、私のうちに、あんなことは、まともに現実にはたち向かっている者には見えないものであり、たまたま、体が萎え、気持が萎えた瞬間にだけ見えた錯覚に過ぎなかったのだ、というふうな不遜な考えさえ芽生え、それが私の神経を鈍くさせていたことは否めない。

特に、教授昇任の間際には、同期で二年早く昇任した隣接学科の藤田への対抗意識も働いて、学部長や古参教授に對し、いま考えても気恥ずかしい媚びを売っていたものだった。

教授に昇任してみると、その椅子が思いのほか煩わしいのに気付いた。煩わしいというより、気鬱である。

「教授になれば、研究者生命は終わったも同然だ」

こんなセリフを吐いていたのは、助手時代のほかならぬ自分だった。

実際、教授のポストを得、一回り大きな椅子に腰を据えた途端、学内のさまざまな役職が降ってきた。学生補導委員、保健管理委員、カリキュラム委員、予算経理委員、将

来計画問題検討委員、評議員などなど、官僚機構のそれぞれに組み込まれた組織の、運営という得体の知れないものに、否応なく係わらなければならぬ。

教授会と称する、ただ時間を潰すことだけのためにあるのではないかと思われる、建前ばかりの意見がだらだら繰り返される、尊大ぶった教授だけのサロン。

退官した学長の叙勲を理由付けるために、一の業績を二にも、三にもいいくるめて了承し合う評議会。

これらの、輪番でまわってくる役職をこなしているうちに、私は慄然とした。まさに自分自身が、研究者とははるかに隔たった、サラリーマンに変貌している。

つかの間の時を惜しんで論文の執筆に、教育にと、髪振り乱してとり組んでいた助教授時代以前には、まず、厭うべき愚物としてしか考えたことのなかった存在。その、サラリー運搬人への、あつけない自身の変貌であった。

しかし、研究や教育の進捗具合とは無関係に、教授という肩書きが、新聞の学芸欄や社会面に自分を登場させ、テレビの座談会にも度々出席させたりするようになった。

階段ののぼり下りに、ふつと足元を掬われていきそうな目眩を覚え、あわてて手摺に寄りかかることがある。

しばらく経つと、目眩の方は治まるのであるが、動悸が音をたてて全身を揺らす。そのまま階段の中途に立ち尽く

し、私は、息が整うのを待って、なに気ない風を装い、三階の自室に戻る。

二年前の職場定期健診で、最初、境界域高血圧だといわれた。それまで、血圧のことなど無知に等しかったのが、図書館で血圧に関する資料を調べたりしているうち、自分はいまにも脳出血で倒れてしまうのではないか、という恐れに見舞われ始めた。

評議会で馴染みの、医学部の遠藤教授に診てもらったところ、定期健診のときは百五十の九十だった血圧が、百八十の百にまで上がっていた。

遠藤教授は、経過を聞きながら、よくあることですよ、と平然としている。そして、多分心因性のもものと思われますから、必要以上にこだわったり恐れたりしないように、とつけ加えた。

しかし、年齢的にはそろそろこの手の症状が始めてもおかしくはないからと、検査室から届いたデータと、申告した私の祖父の死亡原因を見比べながら、一応簡単な薬を使い様子を見る、との断を下した。

遠藤教授は、一番軽い薬を使うといっただけで薬の内容には触れず、一回分として、白い錠剤を各一錠、赤い錠剤を二錠、それに、ビタミン剤と思われる黄色の錠剤を一錠処方してくれた。

つたが、あい変わらず、弱い薬だから心配ない、との説明であった。そして、こういう場所で計測すれば数値は上がるが、リラックスしているときには正常に近い範囲にまで下がっている筈だ、との慰めとも思えることばを続けた。

教壇に立っている間は、病状を忘れようと努め、実際、授業にのめり込むことで、不安や胸苦しさからどうにか逃れていることができる。五百、六百の顔が自分に向けられているということが自分の心にも安定をもたらすのか、授業中は、不思議に体調の方に気がまわらない。

しかし、授業を終え廊下に出たところで、うすら寒さが背中を撫でる。後ろに学生たちの声を聞きながら歩く足裏に、廊下のうねりを感じる。踏み下ろした足が、うねりの底にはまり込み、すうっと数メートルも落下していく思いに血の気が引き、たたらを踏む。

角を折れると、なおも廊下が続く。その廊下が曲がりくねり、低い天井の下にトンネルをつくっている。樹脂製の緑の床に白のラインの引かれた廊下は、白いロープを浮かせた川の流れかと思間違えうほどだ。

私は、その川の浅瀬を渡り、次には滝を下る。講義室は四階、私の部屋はその階下に当たるから、どうしても階段を使わなければならない。

息を整え、テキストを胸に抱え込み、というよりテキスト

目眩の症状は、一週間ばかり薬を服用しているうちに、ひとまず軽快したのだったが、夜中まで執筆したり読書したりすることもないのに、目が冴え、眠れない。

眠れなかった翌日は、首筋のあたりに熱い塊を抱えたみたいなきずが残り、奇妙な圧迫感が胸を締め付けた。

とにかく、自分が自分でない。

頭の片隅に靄がかかったみたいいうつとうしきがあり、自分のことばがひどく間延びして聞こえる。体内の神経回路が、なにもものに勝手に支配されているようで、手も足もバラバラという感じである。

定期健診以来、足しげく訪れるようになった保健室の看護師は、私を見るなり、先生お疲れじゃありませんか、ということばで迎えるのが挨拶代わりになった。

確かに、鏡を覗くまでもなく、自分の顔面から血の気が失せているのがわかったし、頬骨が尖り、肉の部分が落ちてきたのがわかった。そんなとき私の血圧は、上が百七十にも百八十にもものぼり、下も百から百十を下らなかつた。

遠藤教授にいわせれば、かなり過敏になっているということであつたが、私にしては、いままさに血が噴出したのではないかと思えるショックに、日に二度も三度も襲われ、その度に、身を縮めて直後の数分間を過ごすのだった。

遠藤教授は、診察の度に少しずつ錠剤の種類を変えてい

トにしがみつく思いで、一段、一段、身を縮めて下りる。

階段を下りると、動悸の静まるのを待ち、わずか五メートルとない自室までの距離を息を詰めて歩く。

部屋に戻ると、しばらくソファに体を投げ出すのであるが、すぐにまた不安が首をもち上げる。閉ざされた部屋に一人でいること。これが、いいようない恐怖となる。

音の遮断された壁の内に行くと、自分の鼓動が音たてて鳴り、腹腔のあたりで高く脈打つ。肩の力を抜き、静かに息を吐き、リラックスしようと試みる。しかし、鼓動も、血流の勢いも、殆ど意のままにならない。

五日にまたがる休日に、私は一つの決心をして臨んだ。インターネットで調べると、白い錠剤の一方が、精神安定剤であることをつきとめた。

そのせいしか、S教授の処方を受けて以来、目眩の方からは逃れているものの、頭のながが霞でもかかったみたいどころもとない。まるで、神経のどこかが切断されているのではないか、というふうに分る自分の体がてんで所在ない。

私は、朝昼晩一錠ずつのその安定剤の服用をやめることにした。

これは、遠藤教授には無断で行うことであつたから、さすがに不安があつた。だから、できるだけ書齋に留まり、安静に努めながら試みることにした。

最初、白い錠剤が安定剤であると知ったときの驚きは、全く、直下型の大地震が起きたも同然のことだった。

どう考えても、精神安定剤とはただごとではない。遠藤教授の、軽い薬を使う、といういい訳じみた説明からして、どこか胡散臭さが漂ってくる。重大な病名を本人だけに知らせないときの、例の口角なのだ。

自分の肉親に、そういう病状の者がいたのだったか。思いつく限りの名前をあげ、一人としてそれらしい者がいないことをチェックすると、今度は、選りに選ってどうして自分だけが、ということになった。

そういう煩悶の挙げ句、決心をして五日間の休日に臨むことにした。

安定剤の服用をやめた途端、頭の周囲を締め付けていたうっとうしい靄状のものが一気に晴れわたった。

それは、厚い雨雲をつき抜け、青空へ舞い上がり、水平飛行に移ったジェット機自身になった気分だった。

生身の自分に幾日ぶりに戻ったろう。と、そこらじゅう駆けまわりたい気分だった。

なんのことはない。安定剤をやめれば、すぐに元の自分に戻ることができる。服用をやめても目眩の兆候もなく、動悸や違和感など、なにもない。

安定剤をやめることで、状態が急変するのではないか、

二日目の目覚めもよかった。七時前にベッドを出て、コーヒーとトーストをとった。もともと、起きぬけには食欲がなく、勤務の日は大学の軽食で簡単に済ませたり、二日に一度は朝食を抜くのであったが。

煙草がうまかった。こんなにうまいものが身近にあったのか、と感に堪えない気がした。

煙草は血管を収縮させるため、血圧にはよくないということではばらく控えていたのだが、朝食後の一本は、全身の細胞の一つ一つを生き返らせてくれるのではないか、としみじみ思った。

景色がはつきり見えた。リビングの窓の向こうに、このあたりで一番高い豊満山の尾根が望めるのであるが、尾根の色付いた楓の一本一本まで数えられるほどである。

空気が澄んでいた。降り注ぐ光が、空の深さと尾根の色合いとを鋭角に照らし出していた。

すべて、明瞭だった。早朝の空気は、洗われ出たばかりかと思えるほどに瑞々しく、庭の芝生は露の雫を溜め、伸びていた。

犬が鳴いていた。隣家のコリーが、なにかに驚いたのかひとしきり鳴きたて、後に低い唸りを引き摺ったまま鳴き止んだ。

という恐れはあった。特に高血圧の処方であるから、医師の指示を無視して使用を中断したりすれば、突発的な事態も起こり得る、と資料からの知識も得ていた。

ところが、昼を過ぎ、夜になっても、変化はなかった。結局一日目は、これまでになく浮き立った気分のまま、深夜のスポーツニュースなどまで見て、床についた。

翌朝の目覚めもよかった。体中に鬱積していた疲れが洗い流され、風呂から上がったばかりに似た気分だった。

とにかく体が軽い。神経の一本一本が体の隅々までいき届き、いつも胸のあたりや、腹腔のあたりで滞っている脈も、静かに流れめぐっている。

見るもの、聞くもの、触れるもののどれもが、これまで経験したことのない、新しさでそこにあつた。

いつも手にしている万年筆の握り具合。途切れることのないインクの線の太さ。そのほどよい色合い。見れば見るほど、信じられないくらい精緻なものとしてある。

キーを叩けば、必ず命令に従った文字を画面に表示するワープロ。思いつくかぎりの語彙を繰っても、洩らさず掲載している辞書。

カッターナイフの切れ味。その鋭さ。それを包み込む鞘の何気ない堅牢さ。

私は、まわりの一つ一つのものをたちを握りしめ、初めて見るもののごとくに、開いたり閉じたりした。

見え過ぎることに気付き始めたのは、二日目の昼頃だったか。

庭の二坪ほどの畑に、大根を作っている。その大根の葉に、バツタが飛来して葉を食っている。

葉はあちこち無数の穴が開けられ、おりからの風に翻って白い葉裏を震わせている。葉裏にもバツタはむしやぶりついていて、その緑色の顎を忙しく上下させ、音をたてて葉脈まで齧っている。

バツタの逞しい顎が、葉脈を次々に食い破っていくさまを目のあたりにしたとき、私の肌に粟粒が立った。

座っていたソファアを蹴り、テラスに裸足で下りると、目前の大根葉を手で払った。

すると、一斉に、二坪の畑から音が舞い上がった。キチキチ、ガチガチ、クチャクチャというそれは、数十、いやゆうに百を超えていた。

百を超えるかというバツタの飛翔は、私の胸の内に眠っていた燠に、新しい火花を散らした。

あるいは、埋もれかかっていた燠火を、百の羽音が、一息に吹き晒してしまつたのかもしれない。

中腰から立ち上がろうとして、グラリときた。踏みしめる足が、いきなり支えを外されてしまった。踏みしめる脳裏に、一瞬、コンクリートのテラスに仰向けに落下す

自分の姿が浮かんだ。天と地が逆さまになった。私の体は、腰だけの格好でテラスにしゃがんでいた。中腰から立ち上がったつもりが、反対に腰から崩れ落ちていたのだった。

しかし、幸いなことに、厚手のトレーナーを着ていたためか、腕にもどこにも傷を負わずに済んだ。

その晩、一時を過ぎてても二時を過ぎてても眠れなかった。眠気がやってこない。

眠気がくるどころか、気持が澄んでくる。澄んでくるといふより、冴えてくるといった方が適切か。

透明である。これまで見えなかったものが見えてくる。ベッドの上の、透明の闇。

階段教室。五、六百人の学生。癖のあるノートの文字。ペー지를半分に割り、講義のシナリオを左半分に、右半分にその問題点を書いた自慢のやつだ。

暗幕を引く。スライドの電源を入れる。指示棒の先が、光のなかで螢火となり泳ぐ。

学生たちの溜め息が聞こえる。糞面白くもない。なんでこんな授業に付き合わなきゃならんのだ。声は、ライトを落とした教室のあちこちから湧き上がる。しようがないよなあ。こいつが、必須科目だつてよ。

教壇の下から、助手が目くばせをする。部屋の暗さのた

めよくわからないが、スライドの画面と説明がずれているというこらししい。私は、鼻に落ちかけた眼鏡をあわてずり上げ、スライドの画面を次に送る。

咳払いが聞こえる。失笑がもれる。プウさんしつかりしろ、とヤジがとぶ。プウさんとは、私の渾名である。

プウさん、なんとかしてくれ。あくびが出るよ。ほら見てよ、教室の半分は眠っちまつてる。たまんないよ。マジなんだよ、こっちは。

助手が声の主の方に歩きかける。すると、今度は反対の方からヤジがとぶ。低い笑いが広がる。

その場面が、すつと反転する。ブレーキがきかない。力いっぱいフットを踏み込む。まるで抵抗がない。先行車の尾灯が、だんだん間近になる。濡れた舗装に、体ごとぐいぐい飲み込まれていく。

流れる。暮れ始めた景色が、紅葉の始まりかけた山々が千切れて去る。

力のかぎりブレーキを踏み込む。フロントガラスに張りついた雨粒が、菱形に押し広げられる。

スピードメーターの針は、百二十のところを動かない。先行車の尾灯が、ふいに迫ってくる。毒々しい赤味を帯びた、二つの爬虫類の目。

何度も、何度も繰り返し返した。クラッチをローに落とし、サイドブレーキを引き、フットブレーキを踏み込む。体重

のすべてを右足に込め。

しかし、百二十キロのメーターは、貼りついたみたいに動こうとしない。

突然、目前に先行車の尾灯に照らされたナンバーが大映しになった。八八七九。

布団のなかで寝返りをうつ。

眠れない。

時計があたりの空気を刻む。

時間が過ぎていく。いや、過ぎていくらしい、という方が正しいのかもしれない。

時間自体が動いているという実感はないのだが、湿気を帯びた空気が部屋中を包んでいたかと思うと、いつの間にか乾いている。その空気もいつか流れて、次には冷やりとする気配が漂い始める。

あたりは暗い。

闇を吸ったり、吐いたりしている。吸ったり吐いたりしているうち、闇が途方もなく宙に向かって広がったり、反対に縮んだりしていく、という思いにとらわれる。

神経のどこかがひどく凝っている。凝り固まって、鈍痛がくる前の、名状しがたいけだるさみたいなのがある。いけないな、と思考を他にめぐらそうとした。

そう思った刹那、宙をすさまじい光の束がよぎり、音が

走った。

光と音とが交錯する。宙は際限もなく広がり、無数の星雲が生まれ、こぼれるほどの星々が瞬き始めた。

漆黒の闇を背景に、巨大な太陽が浮かび、太陽に寄り添う緑色の天球がゆっくりめぐっている。

微笑んでいる。

星が、太陽が、緑色の天球が、宙のすべてが微笑んでいる。漆黒の闇を、キラリと光の束が走り、生まれたり、死に替わったりするものたちが、笑い合い、ののしり合い、宙のいたるところに列をなし、並んでいる。

あつと思ふ間もなく、あの瞬間の隙間に落ちていく。めくるめく直下降。めくるめくほど、果てのない希薄な空隙。

どこかで、なにかが噴出した。

音のない炎。蛇の舌なめずりに似た、炎のゆらめき。

そのときを合図に、目の前の絵が消えてしまった。

ふっと、蠟燭の火を吹き消してしまったという具合に、星たちが消えてしまった。

太陽も、緑色の天球も、光も、闇も、ののしり合っていたものたちの声も、なにもかも。

ないのである。目に映るものは、なにもない。

耳に聞こえるものも、臭いも、なにものかの動く微かな気配も、なにもない。

重苦しい思考の循環のなかに落ちてしまった。循環し、錯綜し、拡散し止まない思考。

神経が、ある領域までハイになったときに初めて見える(らしい)あの秋の風情。

私の神経は、錠剤の服用を止めたこの二日のうちに、覆っていた薄皮がはがれ落ち、かつての地色が覗き始めたのかもしれない。

大学教員としてのステップを上っていく間に、堅固に塗り固めてきた神経。藤田らとの競争を通じて、容易なことでは地肌に届かぬほどに防具を重ね続けてきた、この十数年。

それらの覆いが、錠剤の服用を二日止めただけで、一気に地色が覗けるところまで穿たれてしまったのだろうか。

私は、窒息しそうな思考から逃れようと、ありったけのことを試みた。布団を跳ねとばし、闇を掻き分けた。腕を、手を振りまわし、思いつく限りのことを叫んだ。

違う。そんな筈はない。消えてたまるか。どこへいったという。どこへいこうというのだ。消えてなくなる。自分が。父も、母も、弟も。学校も、先生も、村も、鴨居の上の二枚の写真も。みんな、消えてなくなる。なんの痕跡も残らない。嘘だ。嘘っぱちだ。

自分には、教壇がある。人いきれで噓せかえりそうな教

室。三十年、殆ど毎日踏みしめてきた教壇。

教授室。北向きに窓があり、書架からこぼれ落ちた本の山。重ねた本の間に、一對のソファ。折りたたみ椅子を入れれば、十人のゼミができる。いつも通つてくる十人のなかの、三人の女子学生。

高速道路。百キロを越えるスピードの遠くに立つ山々。山々の稜線に連なる九州山地の岩肌。ちゃんと見えていゝる。稜線が左前方に現われ、しばらく並走する形になり、やがて後方に去っていく。

三十年間に、七台の車を乗り潰した。軽自動車のときもあれば、スポーツカーや、三ナンバーのときもあった。現在のは、ごくありふれた四ドアのやつである。

そんなすべてが、消えてしまう。噓せかえりそうな教室も、教授室も、女子学生も、高速道路も、山々も。

布団のなかで、私は力の限りもがき、隣近所に響きわたるのではないかというほど大声をあげた。

そのつもりだった。

しかし、私の腕も、手も、布団から出るどころか腰のあたりにも留まらなかったま動かない。

声をあげた筈が、口腔のなかを力なく回るばかりで、しまいには、どこかの隙間にスッと吸われてしまった。

見開いた目に映るものは、闇の色とも、強烈な光に遮ら

れたために目をくらまされた朱の色とも、分かちがたい。ないのである。目に映るものは、なにもない。

だが、微かに、なにかが移っていく気配がある。時の波があたりを浚いいく音か。時間が、異次の空間から空間へと渡っていく音か。

身動きも、叫ぶこともできないなかで、私は、いま奇妙なエーテルに似た形で浮かんでいる自分を、どこかの高みから見下ろしているのだった。

眠ったのか、どうか知らない。

あの瞬間の記憶から戻ったとき、障子に薄明かりがさしていた。

表でバイクのエンジンが響き、状受けがカタリと鳴る。あちこちの辻で犬の鳴き交わす声が、耳元に届く。小鳥の囀りも、一際賑やかになった。

頭の芯に、どす黒い固まりがある。生欠伸がでる。ひきもきらず欠伸がでる。涙が目尻を流れ伝う。

体は自由に動かせる。節々にけだるい疲れがある。

あたりが煙っている。

神経がカミソリみたいに尖っている。冷たく尖るカミソリの刃が、ひどく苛立つているのがわかる。

枕元に立ったときぐらりときた。足元が一気に数メートルも落ち込んだか、と思った。

目の前の襖に縫ってなんとかこなきを得たが、足を踏み出すことができず、そのまま枕元にしゃがみ込んでしまった。

回っている。布団が、襖が、天井が、本箱が、上に、下に、斜めに回る。

反射的に、また立ち上がろうとした。

つんのめった。前に転んだのか、後ろに転んだのかわからない。天井が上なのか、下なのかわからない。必死の思いで布団にしがみついた。顔を布団に埋め、時間の過ぎるのを待った。

吐き気がした。胃が幾重にもねじれていく思いだった。胃酸っぱいものが、口腔中にあふれてきた。

胸やけがした。なにもものかにみぞおちを押されているふうな、息苦しさがある。水のなかに引きずり込まれたとでもいうべき、圧迫感を伴った理不尽な苦しさだ。

部屋の戸が開いて、誰かが入ってきた。私のうめき声か叫び声が、今度は外に聞こえたものらしい。

「どこか、具合でも悪いの」  
妻である。

昨夜の顛末を、彼女は知らない。それはそれで、書齋を私だけの寝室に変えて十年以上になる。この家を改築し

て書斎と子供部屋を作り足したのだから、正確には夫婦の寝室が別になって十一年とちよつとだ。

「頭でも痛いのに」

妻は血圧を心配する。急に頭を抱え上げたり、びっくりさせたりしてはいけないことも知っている。恐る恐る声をかける。

たいしたことはない。といったものの、私は、布団にしがみついたまま動けない。神経の回路がめちゃめちゃにこんがらがったみたいで、自分がどういう格好をしているのか、自分自身わからない。

「汗びっしょりじゃない」

そうか、と思う。

「熱があるのと違う」

そうかもしれない。なにしろ、一睡もできずに闇のなかでのたうっていたのだ。

「寒い。震えてるわ」

寒いのか寒くないのかわからない。要は、とにかく妻の声も、天井も襖も、布団にしがみついた自分も、一緒に回っている。回り止まない。

昨夜からのことが嘘みたいに止んだ。

かかりつけの医師の往診を得ただけである。

医師は、早朝の往診のためか不機嫌な表情のまま、一種

類の錠剤をくれた。

毎食後服用、二日分。と書かれた錠剤六個のうち、一粒を飲み、三時間ばかり眠って目を覚ますと、天井も襖も、ちゃんといつもの場所に嵌め込まれていた。

いつの間にか、妻がパジャマを着替えさせてくれたらしく、脂汗に濡れそぼっていた気味の悪さはなかった。布団も枕もとり替えられ、障子に射す光がまぶしかった。

なにも変わっていない。

私を包むものが、洗い濯がれている。天井も、襖も、射し込んでくる遅い午前の光も、自分の手足も、全身の肌も、静かに息づいていた。

爽快だった。奇妙に浮きたった気分だった。しゃんと、全身の端々まで伸びきる感じがした。

しかし、逆に、一粒の薬によってこれほどまでに変化をきたすというのは、なにか容易ではないことを示しているのではないか、という気がする。

安定剤という一種類の薬を止めようと試みたところ、さらに新しい錠剤を服用する羽目になった。

床を出て、障子を開けた。体のふらつきはない。天井や襖が回った、あの酩酊するといった胸の悪さもない。

庭の大根畑の傍の紅葉が、だいぶ朱を増してきた。今年夏場の長雨で葉の形が縮れたり、色づくのを待たずに散

それは、石粒みたいにこぼれてきたときと同様、乾いた空に、散弾銃でも放つたみたいに跳ね上がっていた。

散弾銃の弾は、軒に隠れてすぐに見えなくなつたが、バラバラという、無機質な音が、しばらく耳をついて去らなかつた。

准教授の石田は、コーヒーを飲みながら、たまたま近くまできたので寄つた、と二回もいった。

私は、パジャマを急いで着替え、客間に出てきた。石田は、私がいまのままで布団にしがみついて呻吟していたとは気付きもしないらしかつた。私の方も、自分がなんの抵抗もなく客間に出られたのが、信じられない。

「よろしいですねえ、やはり。ここの静けさには、古都大宰府の風格があります」

石田には、歯の浮きそうなことをまことしやかな口振りという癖がある。カップの持ち方も気どっている。

「ただのうらぶれたところだよ」

私のことばは、いま一つ素直ではない。

「ここにいるだけで、すつと気持が落ち着きます。なによ、先生の研究にはもってこいの場所ですね」

書棚の研究論集を見わたし、石田はさかんに頷く。研究論集は、発行順に並べているだけであるし、中身は石田も知り尽くしている。なにしろ、石田や、助手の二名との共



著が殆どで、これといってこの頃の自分の成果を留めたものはない。

風土記に見る文化の変遷という、それほど脚光を浴びることのない分野である自分の研究の足元をすくわれた思いで、いささかむつききたが、くだらんことばかりやるにはおあつらえむきの場所かも知れないねえ、などと頬を弛ませたりしている。

それが、ある意味では本音でもあり、ある意味では自虐でもあるという、自分自身でも十数年来整理のつかない気持の芯にからんでくる。

「来年の学会の折は、大宰府探索をコースに入れてはいかがでしょう。隣県で用事を済ましての帰りに、たまたまそんなアイデアが閃いたもので、突然お邪魔させていただいたわけです」

「大学から百キロだ。少し不便過ぎやしないかな」

「二日目のシンポジウムの時間をいくらか削って、現地探索というのはどうでしょう。で、宿泊は二日市温泉という手もあります」

石田は、全くの冗談でもなさそうな口振りである。なんの用事でこのあたりまできたのか知らないし、なにを急に来年の学会のことまでもちだすのか、わからない。もつとも、学会の準備や、関係する仕事全般は石田にまかせているのであるが。

「今回のテーマである、『人間はどこまで自然か』という命題には、自然のなかの古都、つまり定礎と空間だけがとり残されたかつての都督府である大宰府との組合せも結構面白いと思うのですが」

そうか、と思った。至極平坦な発想だ、とあやうく口に出しそうになった。

もともと、『どこまで自然か』というなかの自然とは、『人間のなかに潜む、自然性。つまり、人間の意志の及ばないもの』という命題なのである。

人間の意志の及ぶものとは、いわゆる言語であり、社会であり、文化である。いうなれば、必要に応じ、あるいは必要に迫られ、思考し、発明し、文明化したものである。

人間の意志の及ばないものとは、人間の恣意を越えたもの。自意識や、幸福とか不幸とかの感情を越えたもの。敢えていえば、人間をとりまくすべて。もつと極言すれば、人間という存在のそのもの、といえは当たるだろうか。

そして、その部分からとらえ返した人間、というのが前回から申し送られてきたテーマであった。

准教授である石田には勿論、助手や院生たちにも、それに関係講座の教授たちにも十分説明してきた。

「確かに、まさにいうところの自然だ。自然の歩みとともに変貌を上げてきた古都。いやいや、人間の営みのなんたるかをまざまざと見せてくれるものかな。悪くはないね」

車のスピードと自分の意識のずれも、殆ど意識せずには済む程度になった。

安定剤のことで騒いだあの二日間のできごとはいったいなんだったのか、といまになって首を傾げる。結局、その安定剤は定食に添えられた調味料みたいに欠かせないものとなり、毎食後、いとも無造作に口に入れる。

「肝心なことは、病気にこだわらないこと」

かかりつけの医師がいったとおり、降圧のために必要なものだと納得して処方に従うことで、気持の角がいく分丸くなったのか、いつか体も少しづつ慣れてきた。どうにでもなれ、というほど腹が座ったわけではないが、あの二日間の苦しみをもう一度味わうくらいなら、少々の薬ぐらいなにごとでもない、という気持だった。

なにしろ、天井が回り、襖が回り、自分が回る。挙げ句には、宙が回り、星々が回り。と、突然、宙も、星々も、天井も、襖も、自分も、すべてが消え失せてしまう。音も、光も、時間も、なにかもすべてが。

私には知っている。というより、このことは間違いない事実だという、確信に似たものがある。かつて、あるとき、どこかで、確かにこの情景を見たという実感さえある。

時間が経つことが、なんらかの答えを体に植え付けてくれるのかもしれない。はじめ、こわごわ飲んでいた薬を、

「車のなかからこの山並を眺めているうち、人間というものの、それ自体が風化していく存在なのだと実感し、矢も楯もたまらず先生のお宅にお邪魔した次第です」

「そこには、人間存在とはいかなるものか、自然とはなにゆえにあるのか、そしてまた、一切を手の内に握ると仮定するところの存在があり得るか、などという考察が必要になってくるわけだが」

私は、いつの間にか教授の顔に戻って、石田のことばの数倍を発しようとしている。つい三時間前まで、布団にしがみつき、鼻水とも脂汗ともつかないものを、流し続けていた自分である。

高速道路での運転に、恐怖を抱かなくなった。あいかわらず、時速百数十キロというところをメーターは示している。

かかりつけの医師の診断により、白い錠剤を一ランク下のものにしてもらった。そのかわり、就寝前に、新たに一錠が加わった。

薬を変えて二日ばかりは、頭の芯が霞んでいるみたいだったが、就寝前の錠剤のせいなのか、夢も見ずに眠れるようになった。目覚めもすっきりしている。

それからというもの、歩くときの浮遊感もなくなり、立ちくらみもなくなった。

あまりこだわることなく飲むことができるようになった。  
遠藤教授から、病氣と仲よくなることですよ、と最初相談したときにいわれたことを、かかりつけの医師からもいわれ、改めて思い出した。

とにかく、それほど動転し、それがもとでさらに緊張を高め、気持をあらぬ方向にもつていつていたということだったのだろう。

ハンドルを右手に持ち替え、左手で顎をさする。指先に粗い髭の感触がある。カミソリを使うと肌が負けるので、この頃シェーバーを使っている。しかし、自分の髭はシェーバーには合わないらしく、ところどころにかなりのむらが残る。

ルームミラーを動かし、顎を撫でる。顎にはずい分白いものが混じっている。

五十七歳。

まぎれもない、五十男の顔がある。額の部分が広がり、目尻や口元には深い皺が刻まれている。目の下の肉はたるみ、頬骨は尖って、いかにも油断のならない、胡散臭そうな人物が、鏡のなかから自分を鋭く睨んでいる。

どっぷり社会に嵌め込まれている顔だ、と思う。駅や、満員電車のなか。あるいはダークグレーの少しくたびれたスーツでオフィスに出入りしている、そこらにいくらでも

見かける中年男。感情があるのかなのか、一見しただけでは判別のしようがない、名刺が手足を振って歩いていると形容すべき男。

そうなのだ。自分も二分の一世紀を生き、人並にものがわかったふうな顔で、そこらを歩いている。

市民として、社会を構成する一員として、一応の形はなしている。形だけでいえば、大学の教員という立場を得て、学識経験者というくすぐったくなる呼称までもらっている。

小学校の高学年からは、家業である農業の手伝いに明け暮れ、中学時代など、大人に混じって葉煙草の収穫に、梱包にと泥にまみれていた。高校に入っても、定期試験の最中でさえ、学校から帰ると、田や畑に直行しなければならなかった。

私の育った島は、九州本土から六十キロ離れており、広くはないけれど平地には恵まれていて、食べるにはこと欠かなかった。米、野菜、葉煙草、蜜柑などが穫れ、勿論漁業で生計をたてている者もかなりあった。

人口五万人。

いま考えると、決して小さな島ではなかったのだが、子供心に感じていたのは、息詰まるほどの狭苦しさだった。南北十五キロ、東西十キロという地理のことはおいて、島

人たちに共通の、なにかもすべて島でこと足りるといえる考えが、窮屈に思えてならないのだった。  
「子供に勉強させると、変な知恵がついて、みんな島を出てしまう」

「島を出て、人に使われるばかりの給料とりになって、どこが幸せか。先祖の供養はせん。田畑は荒れ放題」

「勉強など、せずに出来るのがあたりまえ。勉強、勉強というのは、怠けものの口実だ」

「A君は偉い。朝、六時にはちゃんと田圃に出てるし、夕方もとっぷり暮れるまで精を出してる」

「中学を出れば、もう立派な大人だ。稼ぎも一人前。漁師の子は、やっぱり漁師だ」

「誰が後をみる。だんだん弱って動けんようになる親を見捨てても、月給とりになりたくないか」

すべてこんな調子だった。どこの家でも、多少の差はあれ、大人たちは、繰り返し繰り返しそんなことばを子供に浴びせた。

わが家には、新聞がなかった。ラジオがなかった。テレビもなかった。

雨の日に、二階の子供部屋で図書室から借りた本でも読んでいようものなら、階下から叱声が飛んだ。

「遊んでる暇などないんだよ。本降りになったら、立ったまま、芽が出てしまう」

稲刈りの時期を遅らせていると、田圃に立ったまま、熟れた実が発芽してしまう、という。父も母も、明けきらないうちから田圃に出て、体の芯まで濡れ通りながら、朝食前の仕事を片付けてきたのである。

「試験の準備は、夜にすればいいだろ。とにかく、穫入れが先。なんのために高い金払って、高校にまで行かせるんだか」  
父母の声は、だんだんヒステリックになる。返事をせずにいると、階段の途中から上半身が出て、髪を振り乱したまま血走った目で睨む。公立高校の授業料とはいえ、この家では決してばかにならないのだから、その出費の分、働くのが当然、といういい分になる。

二つ下の卓二が翌年受験すれば、五十アールの葉煙草耕作収入と、家族消費分を除いて出荷する米の収入とを合わせても、二人の高校生をまかなうには足りないという。

それに、一番下の浩三も控えている。  
そろって兄弟二人を高校まで出している家は、界限にはなかったし、父母も、最初からその方針ではなかった。中学のそれぞれの担当が、わざわざ家にまで来て、勧めてくれた結果、しぶしぶ納得したのだった。

私など、高校に入学した日に、親族の統領に当たる伯父が招かれ、高校にまで通わせるのは、決してあり余った財産や収入があつてのことではないこと、中学までの成績か

ら、上級学校に進ませないわけにはいかなかったこと、したがって、高校生となるのだから、十分恩義を感じ、村人たちに笑われぬよう、家業にも率先して従事すること、という長い訓示が与えられた。勿論、それ以上の進学は望みようもないこと、という一項もきちんと加えられた。

心臓病もちの母は、実兄である伯父のことばに、涙を拭きながら、この代々守ってきた田畑をお前の代で絶やすことだけは止めておくれ、とくどいほど繰り返した。

私は、高校三年の夏、大学受験を考えている、と初めて口にした。

私の成績レベルの者たちが、二年の始めには進学のことを決めているのに比べ、ずい分遅い選択だった。

父母は、全く予期しないものが目の前に現われたというふうに、私のことばの意味を解しかねているようだった。

「受けるって、じゃあ、この家のことはどうするの。田圃や畑は、誰がみるというの。学費のことはどうするの」

一呼吸おいて、矢継ぎ早にいった。

「卓二も高校生だし、今年の葉煙草の出来の悪さを知らない訳じゃないだろ」

「学費のことなら、自分でなんとかする。四年、四年だけ時間をくれないか」

「約束だろう。伯父さんやみんなの前で、ちゃんと約束し

といわれている。

大学をめぐるいさかいは、高校三年の夏以来、大学入学、大学院入学、現在の大学への助手としての就職と、数年にわたって続いてきた。

大学卒業のときどうして島に帰らなかったかという、公立学校教員試験に失敗し、駆け込みで受けた大学院入試に、たまたま読み込んでいたテキストの箇所が出題されたためか、予想に反して合格しなかった。

皮肉なことに、心臓の検査が必要だった母の入院が、この時期に重なった。私の通う大学の附属病院に、秋口から春先まで入院したのである。

母は、病室で、私の教員試験の失敗のことを首をうな垂れて聞き、病状に影響しかねないと思った私は、それ以上の説明をしなかった。私は、そのとき、大学院入試の合格が決まっていた。

当時の、母や父とのやりとりの細部は忘れてしまったが、いまにして思えば、私は、なにか見えない力で、反対の方へ、反対の方へと導かれていったという気がする。

指導教官であった講座の教授の転勤。その後を追ってきた、現在の職場である大学。どういふわけか教授に見込まれ、軽い気持で就いた一年任期の助手。任期の切れ目に、講座にまわってきた一枚の在外研究員のキップ。

たことを、忘れたのかい」

「一回だけでいいから、チャンスが欲しい。一度、自分の力を試してみたいんだ。大学にいけば、島の教員になるという道だってある」

「卓二はどうする。まだ、一年生だよ。やっと待ちに待った働き手ができると思っていたのに、もっと上の学校に進みたいだって」

あまり丈夫でない母は、肩で息をつきながら、エプロンに顔を埋める。

「自分がどんな位置にいるか、それがわかるだけでいい。

四年間だけ猶予をくれないか」

「二人も高校に通わせているといつて、世間の笑いものになっっているのに、今度は大学。やっぱりいわないことじゃない。知恵がつくとうこうなってしまう。二人とも高校に出したばかりに」

父母のことばどおりになった。八十をとうに過ぎたのに、細々と米や野菜を作り、いまでは餅や芋や果物を孫に届けるのが唯一の楽しみになっている。

田や畑は、借り手もないため、荒れるにまかせ、わずかに身の周りの分だけを耕している。

親戚筋からは、子供に知恵をつけさせたばかりに年寄りだけ残され、田畑を失い、先祖の祭りもあやうくなった、

皮肉なものである。望みもせず、予想もしなかった大学教員としての生活。そして、留学、結婚、新築と、他の誰かが定めたコースをなぞるがごとくに、次々と行く手に道が現われた。

五十代後半までには引退し、子供に後を委ねるのが通常の農家であって、父母は、八十を過ぎたいまも現役である。

口さがない村人たちは、ああいうふうにはなりたくない、と草叢と化したわが家の田畑を指し、頷き合う。実際、数年前までは、たまに帰郷したとき、伯父や伯母たちから、父母がどんなに心細い思いをしているか考えてもみる、と度々詰られたものだった。

伯父が死んで、三年になる。

母は、一番の長兄である伯父を最大の拠り所にしてきたから、伯父の死とともに、人が変わったみたいになり弱くなった。もともと体には自信がないのに加え、いっそう薬に頼る日を重ねるものだから、寝込むまでには至らないものの、近所の魚屋に出かけるのさえ難儀なことになった。

私に子供ができてからは、さすがに島に戻れということも少なくなった。

私自身、助手から講師へ、講師から助教授へ、助教授から教授へと、かなりのスピードでのぼっていた頃だったか

ら、島のことや父母のことは、あまり頭に浮かんでこない状態だった。サラリー運搬人と化した教授になってさえ、一日が勝負そのものだったし、毎日が張り詰めた時間の連続だった。

伯父の葬儀にも日帰りで顔を出しただけで、翌日には、大学の主催する市民大学講座で、「王朝文化と自然」と題する講演を行った。とにかく、高速道路をフルスピードで駆け続けていた。

しかし、そんなとき、私は、出張先のホテルで、奇妙な人物に出会った。

出張は、学部長の代理で、地区ブロックの留学生交流会に出たのだった。

会議を終え、懇親会に出席し、見知らぬ街で二軒のバーに寄って帰ってきた。

それほどの酔いは感じなかった。ただ、飲んだときの癖で、バーに折畳み傘を忘れてきていた。ホテルの玄関に着いたとき、そのことを思い出したのだが、夕方からの雨は殆どあがっていたし、ままよとドアを開けた。

フロントでキーを受け取り、エレベーターに歩きかけたとき、一人の男がロビーの椅子から立って、足早に歩いてきた。

「よろしかったら、ちよっとお暇をいただけませんか。一

いた。画面は、見渡すかぎり砂の原で、その上を風が渦巻きながら走っていく。砂煙があがり、砂の波が生きものみたいに動いていく。

レンズが右に振られ、ズームになる。奇妙な石の形がアップになる。人間の姿に似ているが、人間ではなかった。動物でもない。

砂の波の間に傾いて立ち、肩から上を日と風に晒しているもの。仰向けに倒れ、見開いた眼窩を宙に漂わせているもの。あるいは、前にのめる格好で、ようやく砂原から体を浮かしているもの。

彼らの目も鼻も元の形がわからないほどに崩れ、朽ち、墓石みたいに立っている。

レンズは、さらに、突然どこかのビル街を映し出した。百メートルはゆうに越えそうな、ガラスばりのビル。その幾百という林立。百メートル級のビルの下にも、幾千というビル。そのまた下にも、ビルまたビル。

レンズがとらえるビルの静けさ。ガラスばりのどの窓の内にも、動くものがない。動くものの気配がない。ただ、夕日を浴びて薄赤く染まったまだら雲が、ゆっくりとガラスをよぎっていく。

音がない。ビルや地下道を吹き抜けていく、吃音に似た、あの空気の流れる音がない。

電気じかけの時計が時を刻む音。線路をきしませて近付

つ見ていたきたいものがあるんですが」  
四十代とも五十代ともみえる、頭髪を短く刈り込んだ男は、丁寧なことばには似ない有無をいわせない力で、エレベーターの奥の通路へと誘った。

紺のスーツの後について、私は二つも三つも角を折れ、赤い絨毯の敷かれた通路を黙って歩いた。外部からは隔離されたホテルの通路である筈なのに、どこから入ってくるのか足元を冷たい風が吹き抜けていく。

男は突き当たりの部屋のドアを開いた。部屋は一般の客室とは違う作りで、折畳みのテーブルが十ほど並べられ、周囲はなんの変哲もない白い壁だった。

男は後ろ手にドアを閉めると、天井の照明をいきなり消した。

「いえね、ほんの数分で終わりますから」

くぐもった男の声が、床のあたりで聞こえた。私は、一瞬なにかの危険を感じ、身を振って次にやってくるものから逃れようとした。

「なにも恐れることはありません。珍しいものを、一つ見ていただくだけですから」

男は、低く笑った。  
するすると、幕が上がった。なにかの巻き上がる音がして、突如、正面の壁にぼんやりした画面が現われた。

砂だった。砂が、地平線の向こうまで波うち、広がって

く列車の音。交差点で点滅する信号のデジタル音。工事中の足場を震わせる、掘削機の唸る音。そんな音という音がない。

レンズは、ふいに広角の風景をとらえる。  
球形のものが一つ、二つ、五つ、七つ。赤や青や茶褐色の球形。

テニスボールほどの球形が、画面の端で一際鮮やかな青緑の色彩を放つ。

よく見ると、画面に散らばった球形は、殆どそれと変わらないほどのスピードで、動いている。上に、下に、画面の奥にと、球形の位置が徐々に変わっていく。

レンズ（いったいどういう仕掛けがあるのかわからないが）はキリキリと旋回し、今度は、無限遠に焦点をきり替えたらしかった。

点と点。  
砂粒みたいな淡い光の点が、画面いっぱいになにかをばら撒いたみたいに、点滅している。

蛍。蛍火。蛍の群舞。音のない炎。  
なにかの音が、蛍の群舞を縫って囁く。

「舞えよ、舞えよ、命のかぎり」

ナレーションが入る。蛍火の一つ、一つにまで。蛍と蛍の間の、漆黒の空間の隅々にまで届くかのごとくに。バリトンのすばらしいナレーション。すばらしい演出。

私は、画面の前に男と二人いることも忘れて、身をのり出し、その際立った演出に拍手を送ろうとした。が、フィルムがそこでなくなつたのか、あるいはレンズが次の場面を追うことを止めたのか、目の前の画面から、ぶつくり絵が消えてしまった。

画面のあつたあたりには、あの蛍と蛍の間の漆黒の色に染められた空間の色でもない、かといって画面が映し出される前の、部屋の電気がOFFになつたときの闇の色でもないものが、漂っている。

それは、闇があるとかないとかいうものではなく、色があるとかないとかいうのでもなかった。

消えてしまった。そう、消えてしまったのだった。なにもかも、消えてしまった。

私が、急いで壁のスイッチを探したのは、いうまでもない。男が身を屈めている方に手探りで進み、壁のスイッチを探った。

部屋に入ったときには、十いくつの折畳みテーブルが並べられ、周りは白い壁に囲まれていた。その部屋の感覚をたよりに、私は壁（と思われるもの）を伝つて、左へ左へと回った。左へ左へと回れば、壁のスイッチも、画面が映し出されていたあたりへも、当然たどり着く筈だった。

私は、左へ左へと歩いた。そろそろと、しっかりと、フ

が、いつも自分がする手順に収まっている。念のため、スーツの内ポケットを探った。黒革のサイフには、現金も、カード類もそっくり入っている。

部屋のキーも、自分が決まって置くことにしているデスクの一番上の引き出しに入っている。

頭を振った。昨夜のことを思い出そうとした。会議が終わった後、懇親会に出て、ビールを一本ばかり飲んだ。その後、二軒のバーに寄った。知らない店であるから、水割りや二杯ずつ飲んだくらいで出た。

日頃に比べ、量はわずかししか飲んでいないが、学部長代理で出席した会議の疲れがあつたのか、少し足にくるぐらゐの酔いがあつた。といつても、前後不覚になるほどの酔いではなかった。

小雨のなかをホテルに戻ってきたのは、十時をいくらかまわっていただろうか。会議の資料を抱えたままフロントに出向き、部屋のキーを受け取った。

すぐに六階の自室に上ろうとして、エレベーターに向かい歩きかけた。そのとき、一人の男が現われ、エレベーターの奥の、幾重にも折れた通路に誘い、一緒に会議室とおぼしき部屋に入った。

いやいや、そんなことはない。問題は、そこで見た奇妙な光景だ。

砂粒がカラカラと吹き流されていく、乾いた地平。仰向

ロアのカーペットを踏みしめて歩いた。

五分、十分、三十分。私は、部屋を二、三十周もしたのではないかと思つた。両手の平を壁に這わせ、横に、横に歩いた。

しかし、私の両手に触れるものは、まるで抵抗のない、気体とも液体ともつかない冷やりとしたものである。

確かに、木質のドアを開けて入り、壁のスイッチを押す音を聞いた筈であるのに、ドアに触れる気配などない。部屋を中心には、これも木質の折畳みテーブルが十いくつ並べられていた筈であるのに、部屋の中心部と思われるあたりへ踏み込んでみても、それらしいものに触れることはない。

私は、男を呼んだ。紺のスーツの、頭髪を短く刈り込んだあの男を。

目覚めたのは、六階の自室のベッドでだった。青い笠のスタンドの下には、会議に出たときに下げていたカバンがある。会議で配られた資料の袋も、並べて置かれている。

午前四時。

空気は張り詰め、動いていない。ルームランプの淡い光が、しっかりと部屋のシルエットを浮かびあがらせている。

私は、ベッドから転げ出た。裸足でカーペットを歩き、クローゼットを開いた。スーツにズボン、シャツにネクタイ

けに倒れたまま、宙に虚ろな目を向けている石の像。ビルの静けさ。青い球形。漆黒のなかに浮かぶ無数の蛍。砂粒ほどの蛍の群舞。音のない炎。

瞬間、かき消されてしまったページ。

それは、本当に自分の身に起きたことだったのか。それとも、酔いのなかに、ふとまぎれ込んだ、私だけの妄想であつたのだろうか。

私はそれ以上眠りにつけないまま、朝を迎えた。六階のホテルの窓から見る街の風景は、あたりのビルの窓々に映る己れ自身の姿を何重にも映し、冴えざえと冷えている。季節が晩秋から初冬へと移りゆくということもあつただろうが、曙光のなかに群れ立つビルのさまは、温もりをいっぱいに孕んだ、あの植物の芽立ちどきのときめきなど、かけらも体していなかった。

私はいま、六階の窓から真逆さまに落下したとしても、群れ立つビルの窓々は、私の姿など一瞬たりとも留めやしないかもしれない、と思つた。

考えてみると、その三年前のことが、いまの自分を暗示する一つのできごとであつたのだという気がしてならない。

私が、九度の熱を出し、小学校にあがつたばかりの頃に見た光景。

それを、私は何十年という間、意識の背後に追いやっていた。というより、地中深くに封じ込め、幾重ものロックをしていた、といった方が当たっている。

およそ五十年ぶりに蘇った光景。

八畳の座敷。床の間。お堂の形をした白木の造り物。大黒柱横の鴨居の上。いく分黄ばんだ二枚の写真。

二階の子供部屋から下ろされる度に、いつも誰かに覗き込まれている気配を感じていた。

天井や襖の穴。小さな破れ目。

そこかしこに、かすかに交わされる声。その息遣い。蜘蛛の巣の震え。

「どんなにか島の方がいいものか。お願いだから、もう一度考え直しておくれ」

「この家を捨てていくのかい。お前の爺ちゃんや、そのまた爺ちゃんや婆ちゃんたちが、暮らしてきたこの家を」

「親の欲目ばかりいつてるんじゃないんだ。世のなかには、出来ることと、出来ないことがある。いいかい、あそここの写真のお方が駄目だといわれることは、例えば身が八裂きになるうとも、出来ないんだ」

父や母の声も体も、あそこのお方といったとき、ビクツと震えた。顔面が蠟のように血の気を失い、ことばをつぐより先に、いまにも崩れ落ちるのではないかと思われた。

風景が変わる。

山が飛ぶ。林が飛ぶ。舗装道路がどんどん迫ってくる。自分を飲み込もうと、足元から這いのぼってくる。

メーターは百二十を指している。百二十を指したまま動かない。

珊瑚樹の植込みが千切れて飛ぶ。ガードレールが、めくれ上がる。車軸が唸る。獣の遠吠えに似た唸りをたてる。いまにも溶け出しそうな熱さの舗装道路を、車は次々に飲み込んでいく。

境界域高血圧ということばを聞いたのは、あの光景が私のうちに蘇って、ほどなくだった。

単に、五十半ばという年齢からくるものだったのかもしれない。あるいは、助手から講師へ、講師から助教授へ、助教授から教授へのぼり終えた後の、ふとした気持の隙間にしのび込んだ、なにかの淀みであったのかもしれない。

しかし、いま、私の心のうちに、この三十数年の間、懸命に押し込め、封じ込めようとしてきた呪咀に似たものが、あのホテルでの事件を契機に、迸り出てきたのを感じずにはいられない。

島の呪咀。いや、島からの呪咀、というべきか。

八十を過ぎた父母は、身の周りのわずかな田畑を耕しな

がら、島に住んでいる。目のいき届かない田畑は、草叢と化し、野原と化している。

三人の男子を持ち、育てたのに、浩三が島を出たのを最後に、日々を島人の好奇と憐愍の入り混じった視線に晒してきた。

島のタブーである、子供に知恵をつけさせてはならないという一点を破ったばかりに。

特に、この三十年というもの、私は、中堅研究者として多少の名をあげ、同僚の藤田と激しいつばぜり合いを演じてきた。

教授という名の、体のいい称号を、四十代の前半に得た自分は、どこか心のうちに、傲岸な影を宿し始めていたのかもしれない。

三十で博士の学位を取得し、その研究テーマであった「人間と自然」、あるいは「自然のなかの人間空間」に、それこそ寝食を忘れる勢いでとり組んできた。

研究者としての三十年。とりわけ、助教授時代までの十五年は、研究のスピードも、研究の成果も、鋭いナイフで切り裂いていくみたいな広がりをもせた。学会での発表も何度か記事になり、ライバルも全国に増えた。

病気など気にする暇はなかった。病気にかかる暇もなかったのかもしれない。

それが、五十半ばの声を聞こうとした矢先の高血圧であ

る。高血圧など気に病む方がおかしい、という声があるのも知っている。五十代という年齢には、病気の一つや二つが寄ってくるなど、なんの不思議もない、ということもわかっていく。

私は、ホテルでの事件を契機に、あの光景を、幾度となく目のあたりにしてきた。

砂。虚ろな目の石の像。

蛍。蛍の群舞。

高原を吹き渡る風。

音のない炎。

と、ことばを並べれば並べるほど、ことばと光景とが、間遠くなってくるのは否めないが、だからといって、ことばを拾わずに、悶々としているのはしのびない。

悶々としているのはしのびない、という気持が高血圧を招いたのか。その治療に安定剤を服用しているから、頻繁にあの光景のうちにすべり下りることになるのか。

罰、と教員室で、口に出してみることがある。

自分の研究者としての存在も、結局、地平へ落ちていくための、一つの道程であったに過ぎないのかもしれない。かつて、一日三時間という睡眠で、二年ばかり過ごしたことがある。博士論文提出前と、地域の土豪であったD家の

古文書の解明に当たったときである。

この古文書を通じて、人間の、自然へのやむことのない挑戦、あるいは、自然の掟の前になすすべもなく跳ね返され、敗れ、朽ちていく人間のさまを、自分なりにとらえたつもりであった。

開墾。施肥。治水。品種改良。技術革新。祈祷。祈願。干害。冷害。水害。地震。台風。掠奪。疫病。飢饉。乞食。餓死。間引き。口減らし。

マイホームを持った頃、父母に、島から出てこないか、と誘ったことがある。

しかし、父も母も、いまさら島を捨てて、なんで街中で窮屈な思いをしなければならぬか、とにべもなかった。その後も、折りをみて同じ誘いをしてみるのだが、回を重ねる毎に、いよいよかたくなになる。

「自分らには、もともと子供はなかった。そう思うことにした。そうすると、すっかり気楽になってね」

最近電話に出た母が、のんびりした口調でいった。少し電話口で咳込んだりしてはいたが、まずまず元氣とみてとれた。

帰るのか、帰らないのか、で激したやりとりをしていた三十数年前に比べ、母の体調も比較的持ち直してきた感がある。なにしろ、大病院に入院した頃は呼吸ができず、

上げ、あわててカバンを拾いに行く。私の頭のなかでは、いつか、砂がこぼれ、風が無い始めていた。日本近世経済学史の講義を始めて、三十分は経つただろうか。今日は、藩札の変遷について話そうと思っていた。が、話は、現在の不況の構造について解説しているうち、あらぬ方向へとんでいたらしい。

幾人かの、まだ机に伏せている二、三人を除いて殆どが退室してしまった教室を、私は出た。樹脂製の廊下が長い。鼻の頭にずり落ちてきた眼鏡を、左指で持ち上げた。目眩は、ない。足を踏み出す度に感じていた、廊下が揺れ踊る、あの浮遊感もいまはない。

昼食後に飲んだ安定剤が効いているのか、体の方も、周りとずれることはない。ただ、ときに、自分でも信じられないほどの気分の緩みを感じる時がある。会議の席で。百二十キロで走る車のなかで。

助教時代の自分には全く考えられなかったことであるが、教室で、ゼミの内容の半分ぐらいを失念していることがある。准教授の石田に袖を引かれ、窓の外に遊ばせていた視線をふっと元に戻すことがある。あるいは、微かに記憶している研究論集のなかのことはふいに思い起こし、

心搏が一時停止したりしたこともあった。

現在、小康状態にあるとはいえず、いつ持病が頭をもたげるかわからない。かつての大病院でのデータをもとに、島の公立病院で処置を受けているのであるが、状態の変化になかなか処置が追いつかず、だましましの治療を受けている、といってもいいだろう。

父は、地区の公民館長を長年つとめ、葉煙草耕作組合の役員も、ほんの最近までつとめていたが、腰を痛めてからは、それらも辞した。第一、五十アールの葉煙草の耕作は、父一人でまかなえる筈がない。もともと母が一人前の人手であり、私や卓二や浩三がいて、それでようやくやりくりしていたのだった。

私たちが島を出てから、どのようにして葉煙草の耕作に携わってきたのか。全く迂闊なことであるが、私はその詳細を知らない。

「プウさん、どうしたの。さつきから、同じところをぐるぐる回ってるばかりだぜ」

「これでも必須科目かよう。俺たち、学科の選択を間違えたみたいだ」

「顔色悪いよ。プウさん、今日はこらでやめにしたら」学生たちは、休講、休講と叫びながら一斉に立ち、出口へ急ぐ。机に突っ伏していた者たちも、なにごとかと首を

誰のことばであったか、懸命に思い出そうとしたりする。高速道路の隅々まで覚え込んでいるつもりであるが、カーブや標識の箇所、直前までその所在に思い至らず、あわてて急ブレーキを踏み込んだり、スピードを緩めたりする。

反対に、神経がひどく過敏になるときがある。自分の行動や、提案などに異論を唱えられたり、意見が無視されたとき、穏やかだった水面が、一挙に濁流に変わる。

そんなときの自分は、どうにも御しようがない。目を吊り上げ、容赦なく相手を痛罵する。ことばが震え、体が硬直する。

瞬間的には、血圧が二百にも、二百五十にも上がっていたのではないかと、少し落ち着いた後でそう思う。けれども、神経の一端が異様な振幅を始めたとき、それをただちに静める術はない。

一日、二日、という時間の経過が必要になる。勿論、安定剤の二、三錠をいっぺんに飲み下してさえ、すぐには静まらない。

評議員として、三月を残している。順当にいけば、評議員の後には、二、三年後に学部長選出馬ということになる。

これまでの学部においての自分の役割からみて、学部長選に臨むのは、自分の口からいうのもおかしいが、なんの

不足もない。学部長事務代理という職も、ごく短期間ではあったが、無難に務めている。その間、学部長に替わり、二度の教授会を召集し、議長の役も手際よくこなした。

午後二時から今日の評議会では、わが学部の移転という案件が付議されることになっている。私は、緊急の用務で不在の学部長に替わって、学部を代表して案件の説明をしなければならぬ。

評議会は、大学の最高議決機関であり、原則として月に一度、大学本部で開かれる。私は、一年九か月の間、約二十回に及ぶ会議を欠席したことがない。学部長ともう一人の高田評議員とで学部移転構想を他学部に説明し、了解を求め、いよいよ今日その決定をみるという段階にまでこぎつけた。

開始の二時まで、時間が無い。

何度も目を通した資料に、もう一度目を通す。説明のことは、メモにして別に準備している。

評議会の最初の議題が、学部移転の件だった。

私は、案件説明のために立った。立った拍子に鼻先にずり落ちてきた眼鏡を、左指で持ち上げた。そして、暗記しているメモのことは、頭のなかで反芻しようとした。

ところが、予期していたことが出ない。

私は、深呼吸をし、メモのことは思い出そうとした。

を駆け巡っている。

将来的な学部の展望にたち、現キャンパスでの効率化を図るより、マクロ的視野に立脚し、今後百年を見据えた。

発言する筈であったことばがとめどなく溢れ、頭を、胸を、容赦なく穿つ。

私は、ポケットにあるだけの安定剤をとり出し、噛み砕いた。幾粒あったのかわからないが、どうにでもなれという気持だった。

錠剤を噛み砕きながら、これで学部長選は完全に潰えたと思つた。もつとも、安定剤を最初に処方してもらつたときから、おぼろげな不安を抱かないではなかつたが。

およそ十年にわたる助教としての研究生活にピリオドを打ち、教授のポストを四十代前半の若さで得た。中堅研究者としての立場を失うことへの未練はあつたが、教授としてのポストを得ることが、島を捨てた者としての務めである、と心に念じてきた面もある。

そういうこともあり、自分より二年早く教授に昇進した藤田と競り合う形で、一人研究に没頭し、大学のソファアに寝ることもしばしばだった。教授になれば、父母も、いささかは愁眉を開くことになるかもしれない、と思つたのだった。

そうなれば、父と母が島を離れ、私の元に移り住んでくれることへの布石も打てる、という思いもあつた。

これまで何度も検討し、席上でも度々話してきたことは、思い出せない。

部屋の空気が、少しざわつき始めた。

頭のなかで、どろりとした霧で覆われている。首を捻つてみた。やっぱり、思い出せない。案件は、学部の移転の件である。それはわかっている。が、突如、どういう経緯で話が進み、どういうふう筋が練り上げられてきたか、肝心の部分を失念してしまつたのである。

部屋のざわつきが大きくなった。学長が、驚いた表情で私を見上げている。

動悸が耳にまで届いてくる。自分の顔が青ざめているのが、自分でわかる。血圧が跳ね上がる。二百か、二百五十か。資料を握つた手が、大きく震える。

そのとき、横の席の高田評議員が立ち、案件の説明に入った。

私は、席に崩れ落ちた。なにも見えなかった。高田評議員の説明も、なに一つ聞こえなかった。

自室に戻つた私は、ソファアに座つたまま動けない。魂の脱け殻みたいに、同じ格好のまま座っている。

誰かが、一度ドアをノックしたが、応えなかった。立ち上がれない。

失念した案件の説明が、堰を切つて湧き出し、頭のなか

しかし、私の期待は、ことごとく退けられることになつた。

「昇進は結構だが、田畑の草叢が減るわけじゃない。もつとも、いまさら住み慣れた島を離れるなんぞ願ひ下げだ。

第一、ご先祖さまに対して申し訳がたたん」  
父も母も、決して首を縦に振らなかつた。

あの、幼い日に見た光景は、ひよつとしたら、いまの自分のことを暗示していたのではなかつたか。

そう考えると、あの光景のもつ意味が、臍氣にはあるが、いくらか説明のできるものになつてくる。

百数十キロのスピード。めくれ上がるガードレール。  
教授。教授会。

折れ曲がつて続く廊下のうねり。教授室のソファア。

落下。目眩。安定剤。

草叢。草原。吹き渡る風。

小さな知恵を得、掙を捨てて島の外を覗き、わずかばかりの浅い夢をみるためにすべての精力を傾け、あるいは、掠奪まがいの行為にまで及んだ。

その挙げ句、思いもよらぬ楼閣を築き上げることになつた。しかし、楼閣はある日、砂原を激しく巻く風に吹かれ、曝され、終にゆらゆらと撓み始めた。